博 士 学 位 論 文 要 約

論 文 題 目:　メキシコにおけるサパティスタ民族解放軍の研究―フレーミング論からの分析―

氏　　名：　柴田　修子

要　　約：

本論文は、1994 年 1 月にメキシコのチアパス州においてサパティスタ民族解放軍（EZLN)と名乗る先住民蜂起に始まったサパティスタ運動が、なぜ国際的な支持を得て 20 年以上にわたって運動を継続し得たかを、社会運動論に依拠しながら分析したものである。

本論文ではまず、EZLN が蜂起に至るまでの歴史的過程を分析した。EZLN が結成されたのは、チアパス州南東部に位置するラカンドン密林地域である。ここで明らかにしたのは、EZLN が結成されたラカンドン密林地域は「伝統的な先住民社会」ではなく、自主入植によって形成された新しい社会だったという点である。この地域では、カトリック組織や都市部出世院の左翼運動家など、農民運動を促す様々なアクターが外部からもたらされた。後に EZLN を結成することになる FLN もそうした左翼運動の一つである。他の運動と思想的に大きな違いはなかったものの、最初から武装闘争を志向している点が大きく異なっていた。当初はマイナーな運動に過ぎなかったが、1990 年代に入り、牧畜業の発展とともに激しくなった土地をめぐる紛争やグアテマラからの避難民の流入によって政治的機会構造が変化したことから、武装闘争を支持する先住民が急増した。

蜂起直後武力制圧を行おうとした連邦政府は、メキシコ内外の市民社会からの圧力で停戦を余儀なくされた。サパティスタ派以後武器を使わず、膨大な数のコミュニケを発表し、市民社会との連携を強めていく。サパティスタが発表する文書を世界に発信する仕組みを構築したのは、チアパス州で活動する NGO や国際 NGO だった。本論文では、国際連帯がサパティスタ運動に果たした役割を、１）インターネット情報網の構築、２）国際オブザーバー、３）支援プロジェクトという３つの点から分析し、国際連帯が重要な資源として機能したことを示した。サパティスタが国際的な支持を得た理由として、「従いながら統治する」や「たくさんの世界からなる世界」など、標語化された彼らの政治・行動原理が人々の共感を獲得することに成功したことが挙げられる。サパティスタ運動における国際連帯へのフレーミングには先行研究が存在している。本論文では先行研究の成果を踏まえた上で、先行研究では顧みられなかった EZLN の文書を用いて、どのようなフレーミングが行われているかを分析した。

グローバリゼーションが進んだ現代にあって、社会運動のあり方も多様化している。従来のようなヒエラルキー型で権力志向の運動ではなく、水平的なネットワークの構築によって社会変革を目指す、いわゆるオルターグローバリゼーション運動がグローバルに展開している。サパティスタ運動はこれらの原点とされ、PGA や世界釈迦フォーラムなどさまざまな運動に影響を与えたことは、世界的に知られている。しかし日本におけるサパティスタ研究は少なく、ラテンアメリカ地域研究の分野以外ではほとんど知られていない。サ

パティスタ運動を社会運動としてとらえ、１９９４年の武装蜂起に至る歴史的背景から蜂起後の運動の展開と国際連帯への広がり、２００３年以降の運動方針の転換と自治区の再構築に至る流れを検証することで、サパティスタ運動の持続性をローカルとグローバルの両面から考察したことが、本論文の意義である。